蘊阿頼耶（Skandhâlaya）

原　田　和　宗

1　問題の所在

1.1『十住心論』第六住心の教証としての『大日経』の一節

空海は『十住心論』巻第六の導入部で〈北宗（法相宗）の大綱〉を美文に綴った後，それを〈他縁大乗住心〉の浅略次元の内容として定立する典拠を『大日経』巻第一「住心品」の一節に求めた．

復次，秘密主，大乗行．発無縁乗心，無法我性．何以故．如彼往昔如是修行者，観察**蘊阿頼耶**，知自性如幻・陽炎・影・響・旋火輪・乾闥婆城．（『大正』vol. 18, p. 3b9 ～ 12.）

空海は『大日経**疏**』巻第二の注釈箇所を補足として引用する．法無我性を観じ，無縁の大悲によって菩薩道を行ずるこの段階が「他縁乗」とも「無縁乗」とも命名される所以の説明をまず引用する．次に法無我性を観じる為の具体的方法＝〈蘊阿頼耶〉の観察への注釈文を抜粋的に引く．

至此僧祇，始能観**阿陀那深細之識**，了解**三界唯心・心外更無一法而可得**者，乗此無縁心，而行大菩提道．故名「無縁乗」也．……『楞伽』『解深密』等経［・『瑜伽』『唯識』等論所説*］，八識・三性・三無性，皆是此意也．（『大正』vol. 39, p. 602a 19 ～ 22,29 ～ b1. *［　］内の語句を空海は引用に際し付加．）

〈蘊阿頼耶〉（skandhâlaya）は『解深密経』所説の〈阿陀那識〉（ādānavijñāna），とりも直さず〈阿頼耶識〉（ālaya-vijñāna）に等置された上で，『十地経』の〈三界唯心〉に教証を仰ぐ瑜伽行派の唯識学説体系を意図する key term として注釈される．

1.2『大日経疏』と『大日経広釈』

ところが，『疏』には〈阿頼耶〉の別の語義も続けて紹介されている．

復有殊矣．**阿頼耶**，義云「含蔵」，正翻為「室」．謂，諸蘊於此中生，於此中滅．即是**諸蘊巣窟**．（『大正』vol. 39, p. 602 b5 ～ 7.）

それによれば，〈skandha-ālaya〉とは，五蘊がその中で生成し消滅していく住居，

棲み家を意味し，〈skandha〉にとっての〈ālaya〉という格限定複合語（Tat-puruṣa-samāsa）であるようだ．「諸蘊巣窟」に類する訳語は漢訳『十地経』などの大乗経典に散見しており，『大日経』の「蘊阿頼耶」の原義を探る手掛かりとなろう．尤も，その際，同語を格限定複合語とする『疏』の解釈には従えなくなるが（後述）．

『大日経』（*Vairocanâbhisaṃbodhi-sūtra*:abbr. *VAS*）の西蔵訳の当該文と Buddhaguhya の『大日経**広釈**』（未再治本／再治本）に目を向けよう．

さらに，秘密主よ，大乗に則って実践し，他に依存させざるものたちには〈存在素に自我がないこと〉を本性とする*心が生じる．それはなぜか．即ち，彼らは前世において修行を既に修行しおえている以上，**〈skandhâlaya〉**を習修（or 除去）しつつ**（skandhâlayaṃ vibhāvayantaḥ），［その］自性を遍知していくと（sva-bhāvaṃ parijñāya），幻・陽炎・［鏡中の］映像・反響・旋火輪・ガンダルヴァの城（蜃気楼）の如きものという想念を生じるからである．（*VAS* I．Y. Miyasaka ed., pp. 196,1 ～ 3,198,1 ～ 7．*未再治本の〈raiṅ bźin du〉を採用．**未再治本〈bsgoms pas（or nas)〉；再治本〈rnam par 'jig pa na〉.）

西蔵『経』および『再治本・広釈』は〈skandha-ālaya〉を〈phuṅ po'i gnas〉（蘊の基盤）と訳す．『未再治本・広釈』には〈phuṅ po daṅ kun gźi〉（蘊と全基盤）と〈phuṅ po'i gnas〉という二通りの訳語が見られる．

Buddhaguhya は〈skandha-**ālaya**〉の語義には別段触れない．彼はそれを無理に〈アーラヤ識〉と結びつけたりしない．寧ろ，〈蘊の自性〉（skandha-svabhāva）を〈幻〉等の如しと知って〈法無我性〉を証する局面を唯識観としての信解行地（adhimukti-caryā-bhūmi）で解説する．（引用を断念する．『広釈』の詳細は酒井真典［1987］『大日経広釈全訳』，pp. 52 ～ 53，参照．）〈蘊阿頼耶〉の扱いを異にしながら，「住心品」の当該節を〈唯識観〉で説明する点では『疏』と『広釈』とは一致するようだ．

以下，小乗聖典の〈ālaya〉の先駆的用法を再確認しつつ，大乗経典で〈skandh-âlaya〉という term が使用される典型的な文脈を探り，『大日経』が受け継ぐ大乗仏教思想の潮流の一断面を眺望したい．

2　声聞乗に由来する〈Ālaya〉と〈An-ālaya〉

2.1（Pāli）〈māna〉〈anupasama〉〈avijja〉と対等の〈ālaya〉

Asaṅga は『**摂**大乗**論**』I「所知依分」で声聞乗の聖典に〈アラーヤ識〉が別名で説かれており，有部の『増一阿含』（如来出現**四徳経**）中に生類（prajā）が愛し・楽い・欣び・喜ぶ対象として登場する〈阿頼耶〉もその一例だと指摘した（長尾雅人［1982］『摂大乗論　和訳と注解・上』，pp. 117 ～ 120）．その経文の漢訳『増一』へ

の同定，パーリ『増支部』との対比を始めとして，部派典籍中の〈アーラヤ〉の使用例の網羅は月輪賢隆氏によって完遂されている（月輪 [1971]『仏典の批判的研究』所収「小乗典籍に於ける阿頼耶」）．同『四徳経』には，生類が愛する対象として 1)〈ālaya〉（所著）・2)〈māna〉（憍慢）・3)〈an-upasama〉（輪転 /lit. 無寂静）・4)〈a-vijja〉（無明）が枚挙される．1・2・4 は生類を輪廻に留まらせる要因，3 は寂静（i. e. 涅槃）の矛盾概念たる無寂静，つまり，輪廻自体を意味していよう．

2.2（Pāli）〈dhamma〉〈nibbāna〉〈nirodha〉, etc. の別名としての〈an-ālaya〉〈ālaya-samugghāta〉

同経は続けて，上記の生類に対して〈an-ālaya dhamma〉（不染著法 / アーラヤ無き法）を始めとする四種の稀有なる法が如来によって説かれさえすれば，必ず衆生はそれに耳を傾け素直に了解する心を起こすと述べる．同経の文脈は，菩提樹下の釈尊がアーラヤを欣び・愛し・楽しむ生類には自己の証得せる法は理解し難いので説法を躊躇したことを示すパーリ『中部』[第 26 経] などのそれ*とは対照的である．（*同系列のパーリ『律蔵』「大品」の重要性については津田真一 [1998]『アーラヤ的世界とその神』を参照．）その他，パーリ聖典には〈nibbāna〉〈nirodha〉〈mutti〉に対する〈taṅha-kkhaya〉〈virāga〉等々の／類語のリストに〈an-ālaya〉〈ālaya-samugghāta〉（アーラヤの根絶）が見出せる．

2.3〈Ālaya〉の語義：〈Kāma-guṇa〉〈Taṅhā〉？

パーリ注釈家 Buddhaghosa は例の『四徳経』の〈ālaya〉については〈pañca kāma-guṇā〉（五妙欲）と注釈するが，大抵の場合，〈taṅhā〉（渇愛）と言い換える．『大毘婆沙論』（巻第一百四十五「根蘊」）の或る論師は「欲界繁」等の語義をその法が〈欲界等の阿頼耶所蔵かつ摩摩异多所執〉であることと説明する際，〈阿頼耶〉を「愛」と注記する．『瑜伽論』「声聞地」（種姓地）は〈ālaya-tṛṣṇā〉（阿頼耶愛）が最初から無涅槃法補特伽羅の身体に付着（āśraya-sanniviṣṭā）しているという（cf. 恵敏 [1991]「『声聞地』の「不住種姓」について」『仏教文化』24）．（部派の論師／注釈家には〈アーラヤ〉を〈渇愛〉に等置する傾向が窺えるけれども，喉の渇きに襲われた鹿が陽炎（mṛga-tṛṣṇikā）の水を追い求めるかの様に，生類を駈り立て，狂奔させるイメージを惹起する〈渇愛〉と，元々，住居・隠れ家・棲み家を意味する〈アーラヤ〉とではその原意がかなり異なる．〈アーラヤ〉の原意から派生するのは，住居への愛着だとしても，寧ろ，輪廻的世界に安住の地を見出し，そこで安逸を貪りたいという安定志考，現状維持への欲求であって，

涅槃とは正反対のベクトルをもつ.）

3〈Skandhâlaya〉〈Bhavâlaya〉

3.1〈Skandha＝ālaya〉

部派聖典に由来する〈ālaya/an-ālaya〉の用法を大乗経典中まず『維摩経』が継承する.『華厳経』「入法界品」になって,〈skandhâlaya〉という複合語表現が現れ,『十地経』「第二地／第五地」『金光明経』「空品」『楞伽経』「偈頌品」などを経て,『大日経』「住心品」に伝承された.「入法界品」には〈bhavâlaya〉という同義語も垣間見られ,『楞伽』「偈頌品」に再登場する.（紙数の都合で「入法界品」のみを検討する.）〈skandha-ālaya〉という語句は『四徳経』の〈ālaya〉の意味を巡って『摂論』に紹介された三異説のうちの一つを想起させる.三異説とは 1)**〈pañcôpādānaskandha〉（五取蘊）**・2)〈rāga-sahita-sukha-vedanā〉・3)〈sat-kāya-dṛṣṭi〉であり,『分別秘義釈』は,順次,1) Vasumitra・2) 大徳 Meḥu thuṅ（?）・3) 大徳 Ghoṣaka といった小乗論師の説とする（cf. 長尾 [1982], pp. 127～129）. Asaṅga はこれらを論駁し,4)〈ālaya-vijñāna〉を妥当と主張した.皮肉なことに,1)〈skandha〉をもって〈ālaya〉と看なす解釈は,夙に上記の大乗諸経典に採用され,複合語化されていたのである.（この場合,〈skandha=ālaya〉は同格限定複合語（Karma-dhāraya-samāsa）である以上,「[五] 蘊という安逸なる棲み家」と訳しておく.）

3.2 *Gaṇḍa-vyūha*（*GVy*）

「入界法品」（*GVy*）における〈ālaya〉〈skandhâlaya〉〈an-ālaya〉の用例は頗る多い.今は [1] 菩薩（善知識と同義に扱う）の誓願・[2] 菩薩の特性というコンテキストの代表例だけ摘出してみよう.

[Ia] *GVy* §26 [Jyottama] 無上勝長者は説法の多様な目的を善財（Sudhana）童子に語るなかにいう（漢訳語は『八十華厳』のもの.頁数は割愛）.

一切の世界（の生類）をして [自分たちの世界が] 安住の場であるという想念を抱くのを**除去せしめる**為に（sarva-jagat-pratiṣṭhā-saṃjñā-gata-**vibhāvana**-tāyai）,**安逸なる棲み家なき**如来の法（**an-ālaya**-tathāgata-dharma 佛**無依**法）を明示する為に,[法を説きます.]（P. L. Vaidya ed., p. 146,27.）

〈pratiṣṭhā〉（安住の場）と〈an-ālaya〉とはここでは対（or 矛盾）概念をなす以上,前者は〈ālaya〉と同義である.そして,前者（pratiṣṭhā）に関する想念を対象とす

る〈vibhāvana〉（除去せしめる）という同名詞は，〈skandhâlaya〉に対するに〈vibhāvayat〉という現在分詞（?）形の動詞を宛う『大日経』「住心品」の用例との近似性を印象付ける．しかし，頻度の点では，「入界法品」や『十地経』では uc√cal（抜け出す）及びその使役形の動詞表現を伴う用例が圧倒的に多い．

[1b] *GVy* §34 [Vāsantī] 婆珊婆演底主夜神は闇夜に a) 森林や荒野で道に迷う人々，b) 地域社会にのめり込んで苦しむ人々，c) 各家庭のしがらみに苛まれる人々を救済した後，夜神は［回向／誓願］心を起こす．

a) 願わくは，この善根によって，輪廻の森林・荒野に遭難し，劣悪な境遇という［迷］路を歩む生類たちを一切の苦しみから解放せしめ（sarva-duḥkhyebhyaḥ parimocya），究極の幸福かつ安穏なる場＝一切智者性への道に（atyanta-yoga-kṣeme sarva-jña-tā-mārge）安置せしめられますように．（Vaidya, p. 173,22 ～ 23.）

b) 願わくは，この善根によって，一切の生類たちを**［五］蘊という安逸なる棲み家**への執着から抜け出さしめ（**skandhâlayâ**bhiniveśād uccālya），**安逸なる棲み家無き**一切智の智慧に（**an-ālaya**-sarva-jña-jñāne）安置せしめられますように．（p. 173,25 ～ 26.）

c) 願わくは，この善根によって，自分たちの［六つの内的］認識部門という村落に依拠する（svâyatana-grāma-saṃniśritān 貪楽六処聚落）一切の生類たちを輪廻の境遇という対象域から抜け出さしめ（saṃsāra-gati-viṣaya-gocarād uccālya），一切智者性という領域に（sarva-jña-tā-gocare）安置せしめられますように．（p. 173,29 ～ 30.）

これら三誓願も密接に関連する．生類の現状を a) 輪廻という森林に遭難し，b) 五蘊という安逸なる棲み家に執着し，c) 六内処という村落に依拠するものと把握した女神は生類を a)［輪廻に伴う］一切の苦しみから解放させ，b) 五蘊という棲み家への執着および c)［かかる執着のせいで招来される］輪廻の境遇という領域から脱出させるよう手段を講じる．女神が彼らを導かんとする理想の目標は b) 輪廻の苦しみをもたらすだけの偽りの棲み家をもたず，a) 究極的に幸福かつ安穏なる場であるという条件を満たす c) 一切智者性（＝一切智者の智慧）である．

[1c] *GVy* §38 [Praśānta-ruta-sāgara-vatī] 寂静音海主夜神の説法目的も同様のものを含む．

［五］蘊という住居を好む（**skandha-niketâ**śayānāṃ 愛著**五蘊**）生類たちが**安逸なる棲み家無き**法という領域（**an-ālaya**-dharma-gocara **無依**境界）に住まうようになる為に，法を説きます．（p. 222,1 ～ 2.）

ここでの〈skandha-niketa〉は〈skandhâlaya〉と同義であり，〈ālaya〉は〈niketa〉とも交換可能である．

[2a] *GVy* §24 [Utpala-bhūti] 鬻香長者・優鉢羅華は菩薩のあり方の一部をこう

描写する．

一切の**安穏なる棲み家・住居**に依拠しないでいながら（sarvâ**laya-niketâ**-niśritānāṃ），しかも，一切の**生存という安穏なる棲み家・住居**にあえて遊行される［菩薩］たちの（sarva-**bhavâlaya-niketa**-cāriṇāṃ）修行を［どうして私が］知り［得ましょうぞ］．…（p. 142,4.）

今度は〈bhavâlaya〉が〈skandhâlaya〉と同義的に使用される．先述の菩薩の誓願・説法目的は生類を〈五蘊という棲み家〉から抜け出させて〈棲み家無き〉一切智者性に安置させる点に尽きていたが，菩薩自身は既に〈五蘊という棲み家〉から抜け出ているにも拘わらず，一切智者性に安住はしない．先述の目的の為に，菩薩は生類がいまだ屯する〈三つの生存（三界と同義）という棲み家〉にあえて遊行するのを厭わない．

[2b] *GVy* §54 [Maitreya] 菩薩のそのような生き方は，弥勒菩薩と善財童子の対面場面の終局近くの問答にも端的に表明されている．

［マイトレーヤ菩薩は］答える．「…氏族の子よ，菩薩たちの［歩む］道のりたるや，…**安穏なる棲み家もなく住居もなく住居もない（無処無著）**道のり（**an-ālayâ-niketa**-gatiḥ）である．…顧恋することもなく**住居することもない**（an-avekṣâ-**niketa** 無恋**無著**）道のりである．…されど（api tu），氏族の子よ，菩薩たちは教化すべき生類のことをあえて顧恋するが故に，［菩薩たちの道のりは］大悲の道のりでもある．菩薩たちは苦しめられる生類たちをあえて救済するが故に，大慈の道のりでもある．…」（p. 416,16 ～ 20.『般若経』との対比については cf. 津田 [1998], pp. 204 ～ 224.）

3.3　結語

結局，『大日経』「住心品」と同一文脈の〈skandhâlaya〉の使用例は先行経典にはなく，その文脈は『大日経』独自の構成である．しかし，大乗経典は部派聖典の〈ālaya/an-ālaya〉の用法を引き継ぐだけでなく，〈五蘊〉を〈アラーヤ〉（生類を輪廻に繁ぎ止める安逸なる棲み家）とみなす観点から両語の複合語化を『華厳』「入法界品」で編み出しさえした．同時に，かつて世尊にさえ説法を躊躇させた生類の〈ālaya〉は菩薩の利他行を動機付ける生類の〈skandhâlaya〉として一新され，経典思想史上，菩薩の行観念の主軸・旋回軸の機能を託されるに至った．その限りでは『華厳経』の末裔『大日経』で〈skandhâlaya〉こそは大乗実践者（菩薩）が習修し遍知する対象としてまことにふさわしかったといえよう．

〈キーワード〉　大日経，華厳経，蘊阿頼耶

（龍谷大学非常勤講師）